

「ありがとう！出産を支えてくれた助産師さん」

樋口 美紀

2019年4月、私の一人息子は新一年生になりました。3月25日生まれの為、ほかの新入生より小柄ですが、小さな背中に大きなランドセルを背負って元気に通学しています。この、入学という節目を迎えた今、息子を出産した時の事が鮮明に思い出されます。

今から6年前、息子の出産のために、人生で初めて入院をすることになりました。自然分娩を希望し、助産師さんが中心となるバースセンターでの出産を選択し、妊娠中の食事や運動など体調管理に十分留意して、希望通りバースセンターに入院できました。

不安と緊張、そして、少しのわくわく感の中、入院セットを持って陣痛の始まったお腹とともに病院に行きました。

「出産はまだ先になると思うから、少しでも寝ておきましょう」と、担当の助産師さんに促され、緊張感から少し解放された私は、眠ることができました。そこから数時間後、激痛とともに目が覚めました。出産したのは、それから約9時間後なので、本当の陣痛との長い戦いが始まったのです。

陣痛の間隔が狭くなっても、なかなか赤ちゃんが降りて来ず、破水もしなかったため、ひたすら痛みを耐える時間が続きました。辛さのあまり、助産師さんに何度も「破水させてください」と頼んだほどです。その度に、「赤ちゃんにもうすぐ会えるからがんばって」「陣痛のあいまには、少しでもリラックスして」と励ましてもらいました。

陣痛に合わせて、いきんでもいきんでも生まれなわが子に、私の疲労は限界に近づいていました。痛みで意識が朦朧とし、くじけそうになる私に、常に助産師さんが寄り添い、声を掛けてくれたことで、何とか意識を保ち、出産に向き合うことが出来ました。

元気な産声をあげて生まれてきてくれた息子を抱いた時には、涙が止まりませんでした。約25時間にも及ぶ分娩時間でしたが、それを乗り越えることが出来たのは、何事にも動じない強さと優しさを持ち、私を信じて励ましてくれた助産師さんのサポートがあったからと、とても感謝しています。

バースセンターで助産師さんに支えられ、家族に見守られて出産できたことは、本当に幸せでした。

余談ですが、夫もそばに寄り添ってくれましたが、陣痛の痛みを耐える為に握った夫の手は、私の爪跡が残るほど強烈な強さだったと言っています。そして、わが子の誕生に立ち会い生命の尊厳に触れると共に、わが子を出産する妻との時間を共有できたことは、忘れられない素晴らしい経験だった。また、母親の大変さがわかったと、労ってくれました。

「母の入院を通して看護師として学んだこと」



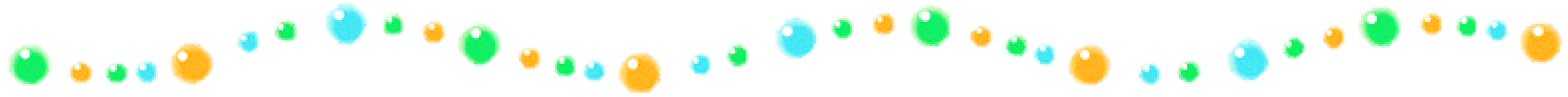
N.M

「じゃ、行ってくるね。」いつものキャリーバックを車に乗せ、母は颯爽と出かけていきました。2泊3日の入院予定でした。「遠いし面会は来なくていいからね。退院の日は会議があるから帰宅は夕方になります。」入院前日、母は特に緊張している様子もなく、そんな母をみて私たち家族も殆ど不安はありませんでした。

入院2日目、胆嚢結石手術後で狭くなった胆汁の通り道を切開し、広げる処置が行われました。検査当日は父が付き添いました。帰宅した父から「予定の処置はできたみたいだが、大分時間がかかった。麻酔はかけたけど、途中動いてしまって中々進まなかったと説明された。」と。翌日、強い吐き気と腹痛が出現し、容態は変化してしまいました。合併症の膵炎を発症してしまったのです。絶食、胃管カテーテルの留置、膵炎治療薬の24時間持続補液、鎮痛剤の投与と新たな治療が開始されました。医師からの説明を聞くために病室に入ると、そこには憔悴している母の姿がありました。私は啞然とし『このまま死んでしまうのではないか』と最悪の事態を考え、不安でいてもたってもいられなくなりました。私は看護師として12年目になりますが、この時改めて常に患者さんの家族は、不安や恐怖、悲しみと戦っているのだと気づきました。私は連日、一目でも母の顔を見たいと思い、仕事を終えてから面会時間ギリギリになっても、病院へ車を走らせました。母の希望を聞きながら、鎮痛剤が効いてる間に洗髪や足浴、マッサージなどもしました。徐々に痛みが和らぎ母の表情が明るくなっていきました。「今日はこの本読破した。」「退院したらあんみつが食べたい」「早く仕事に復帰しないとね、今、大変な時期なのよ」などと、病状の回復とともに前向きな会話が増えていきました。そして採血データも良くなり20日間の入院生活から解放されたのです。

今、母の入院を振り返り考えています。良く三位一体という言葉を使います。三つのものが、それぞれ独立性を持ちながらも一つであると理解していますが、私は患者さんの回復過程においては四位一体であると強く思いました。つまり、医師、看護師、患者、家族の4者です。今回の母の入院で看護師の重要性を強く感じました。担当看護師さんは受け持ち日以外でも来室され、病状の観察や一番の困りごと、今後の予測など細やかに対応してくださいました。また、病状説明時には毎回同席してください、不明な点はないか、他に主治医へ確認したいことはないかなど、いつも配慮して下さいました。私たち家族へも視点が注がれ、精神面でも沢山フォローをして下さいました。24時間、昼夜を問わず傍で支えてくれるのは看護師です。看護師は医療と生活の両者を看ると言われていますが、入院生活の中で清潔や環境整備など、少しでも母の闘病意欲が前向きになることを考えケアしてくださいました。入院中の看護師の関わりを母から聞き、感謝の気持ちでいっぱいです。そして、私も今、目の前にいる患者さんやご家族の方々に、この経験を生かして看護をしたいという思いです。母の入院を契機として家族の絆、周囲の方々への感謝が強くなる体験でした。

「勇気とチャンスを与えてくれた看護師さん」



大野 貴史

私は忘れられない病気をしたことがあります。人生を大きく変えた病気でした。

胃潰瘍で吐血し、倒れて救急車で運ばれた時には、意識はありませんでした。気が付いた時には、病院内で、全身の検査をされていました。だんだん怖くなったのを覚えています。助かりたいという思いだけでした。

仰向けのまま動けず、寒く、「ああ、人間ってこんなに簡単に死んでしまうんだなあ。あつという間なんだなあ」と、感じました。

そして、この時は、色々なことを考えてしまいました。人見知りで会話が苦手で、今までたくさんのお事を避けて生きてきたことを後悔もしました。反面、元気になったらやり直したいとも強く思いました。

内視鏡手術が始まり、どれくらいの時間がかかったのでしょうか。目が覚めた時、先生や看護師さんから声をかけられました。その時「助かったんだなあ」と思いました。

入院中、これからの生き方や考え方を学べた時間はとても大事なことでした。

退院後、妻となる女性と出会い結婚できたのも、一度失ったお店を再開できたのも、看護師さんをはじめとする医療関係者の治療や日々の励ましのことばでした。

今は無理をせず、フランス料理店を経営しながら、訪れるお客様との会話を楽しみ、充実した時間を過ごしています。

私にもう一度勇気とチャンスを与えてくれた看護師さんには、感謝の気持ちで一杯です。